EurekaXIV

六年制通信　№23　令和８年10月30日（金）号

訳語募集

18日の「入試説明会」も無事終了しました。オープニングを飾ってくれたダンス部の諸君、探究活動の発表をしてくれた１Ａの中川陽貴、５Ａの安濃巧武の両君、ガイドウォークを手伝ってくれた生徒会と合唱部の諸君、本当にありがとうございました。説明会に参加してくれた児童・保護者の中には君たちを見て受験を決める方がたくさんいらっしゃいます。ありがたいことですね。

さて、私は今回の説明会に限らず、様々な場で児童・保護者の皆さんに話をする機会があるのですが、最近は決まって現代は「答えを早く知りたいという欲求にAIが応えてくれる」ので、検索できることで勉強した気になってしまう、それがよくないという話をします。ネットの世界には偽情報が溢れています。鵜呑みにしてはいけません。また、検索できることといつでも頭から取り出せるということは全く違います。島崎藤村の「初恋」は、検索すればすぐ出てきます。しかしその詩を暗記し、いつでも暗唱できることの方が百倍君たちのためになるのです。頭の中に入っている言葉の数々が君の血肉となり、人格を作るのですから。

昔から便利なツールを発明するごとに、人は先人たちが修得してきた技術を失ってきました。現代のAIは「便利なツール」どころではありません。従って、これに頼り切ってしまうことで私たちが失うものの大きさは、測り知れないのではないかと危惧しています。情報のいっぱい詰まった便利すぎるツールを持っていることで、自分の頭で考えることを放棄してはいけません。むしろ、現代こそ君たちは「辛抱強く学ぶ」ことが大切なのだと思います。これは私の考えですが、ツールは君たちに近道を教えようとする気がしています。君たちもツールにそれを求めているのではないかと思います。A地点からB地点へ移動する場合の、地理的な近道もそうですが、勉強する場合も近道、即ち効率のよい勉強の仕方、つまり 時間の節約ですね、それを求めている気がします。勉強をしていてわからない問題に出くわすとすぐに答えを求め、すぐに応じてくれる機材がある。一見非常に頭のいい人がそばで教えてくれているようなものです。しかし、これを習慣にすれば君から「自分で考えて答えがわかった喜び」も「辛抱強さ」も失われます。特に、辛抱強さを失うくらいなら性急に答えを求めなくていいと思います。答えのわからない状態が続くことを恐れてはいけません。わからない状態、宙ぶらりんの状態に耐えて下さい。そういう、よくわからない状態に耐え、性急に答えを求めず、わからない状態に耐える力を「ネガティブ・ケイパビリティ」と言います。前に帚木蓬生の『ネガティブ・ケイパビリティ』という本を紹介しましたが、

あの時にも少し説明したように記憶しています。ちなみに「ははきぎ」も「ほうせい」も『源氏物語』ですね。雅なペンネームですこと。帚木さんの本によれば、ネガティブ・ケイパビリティ negative capability は「負の能力」もしくは「陰性能力」と訳されています。意味は「どうにも答えの出ない、どうにも対処のしようのない事態に耐える能力」あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不確実さや不思議さ、懐疑の中にいることが出来る能力」であると説明されています。これ、みなさん、「負の能力」や「陰性能力」という訳語、どうですかね。私にはわかりにくいですね。もっといい日本語はないものか。私は前々から、無理してカタカナ語を使う必要はないと思っていまして、例えば最近よく聞く「レジリエンス resilience」など、聞いてぱっと理解できる人の方が少ないのではないですかね。「回復力」でいいではないですか。「心の自然治癒力」とかね。他にも「オン・デマンド on demand」なら「注文対応」でいいでしょうし。

ところが「ネガティブ・ケイパビリティ negative capability」にいい日本語が浮かばなくて困っています。「ネガティブ」と「ケイパビリティ」を別々に訳して繋げて「否定的能力」や「消極的能力」と言っても、なんか違いますよね。「性急に答えを求めずにわからない状態に耐える力」なのですから。皆さん、いいアイデアありませんか。

今週のおすすめ

・夏目漱石　『草枕』　（新潮文庫）

読んだことのない人でも冒頭の名文句は知っている、そんな本です。

「山路を登りながら、こう考えた。

智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」どうですか。どこかで聞いたことがあるでしょ。

あれはどこの大学でしたかな、この部分を英作文しなさいという出題をしたのは。皆さん、トライしてみてはいかがかな。日本語が難しかったりしてね。

私は以前から、同世代の人で好きな作家は夏目漱石と答える人を信じられない気持ちで見てきました。漱石の、例えば『吾輩は猫である』を本当に観賞しようと思ったら並大抵の教養では無理です。あそこに登場する人物描写や諧謔や嫌いな同僚に対する嫌味や引用される古今東西の文学作品などを知らなければ、漱石が面白がって書いている部分（これがたくさんあるのです）を到底理解できないと思います。

この『草枕』でも注釈は 30 ページを越えます。「市井の一豎子」「空山一路」「蒼勁」「曾遊」などなど、何のことか現代人には理解不可能ですよね。これらの注釈が 30 ページ以上あるわけですから、読み通すのに辛抱が必要です。だからこそ、一度は手に取ってほしいと思うのです。ちなみに、漱石で苦労するのですから鴎外や露伴はもう私たちの手に負えなくなっているように思います。トライはしてほしいけどね。

市井の一豎子：（しせいのいちじゅし）俗世間に住む一人の未熟者（青二才）。

空山一路：ひとけのない深山に道だけが一筋のびていること。

蒼勁：（そうけい）字が古体で、勢いの強いこと。　曾遊：（そうゆう）かつてここに遊んだこと。

BGM は　Mrs. GREEN APPLE の *ケセラセラ*　でした…。